

東北アジア学術交流懇話会ニュースレター

うしとら

第5号

● 目次 ●

論点：東北アジアとシベリアの資源	1
萬華鏡：西シベリアにおけるダニの感染リスク	2
Area Report [SIGNAL]：「ロシア」・「モンゴル」・「中国」・「朝鮮地域」	3
活動風景	4.5
日本館便り	5
課題探訪：地球温暖化問題の政治的状況	6
センター動向	6
東北アジア史研究最先端：津軽十三湊と日本海交易の展開	7
科学技術交流の新展開：機器のリユース活動	8



論点 東北アジアとシベリアの資源

全 (Chon) インタナショナル (株) 社長 全 民濟 (チョン・ミンジェ)



シベリア、極東の広大な地域には世界で最も豊かな資源があります。かつてソ連はこの辺鄙な地域の戦略的な開発をすることによって、ヨーロッパの一強国から世界の強国へと浮上してきました。この開発は軍事増強につながりアジア太平洋諸国の強い関心を引き起こしました。

しかし、このシベリア開発は決してなまやさしいものではなく、ソ連にとって大変な経済的負担になり、国内的にはヨーロッパロシアの強い不満を買いました。Skovrdino から Tynda を経て Neryongri に至る Little BAM は1979年ようやく完成され、Neryungri-Chulmen 炭田からの石炭の積出しが開始されました。また、経済的軍事的目的をもつ BAM (Baikal-Amur Mainline) 鉄道は1974年から10年の歳月と320億ドルの巨額を投じて自然条件の劣悪な沼沢、永久凍土地帯、荒野と松林地帯を貫通する3115 kmの鉄道として完成されました。

更に生活条件の厳しいこの酷寒の地での地域開発の苦労は並大抵のものではありませんでした。彼等はまた1985年の春から Neryungri-Yakutsk 間200の橋梁を含む850 kmの難工事にとりかかりました。この工事は最終的には Magadan から Yakutsk を経て Mirny に至る鉄道を建設し、150万平方kmに及ぶ広大な地域に包蔵される資源の宝庫への接近通路になるでしょう。

しかし、これはほんの序の口で、天然ガス、石油、石炭、水力の開発、鉱石の採掘、発電及び送配電や通信施設の建設、木材の伐採と運搬及び3500 kmのガスパイプラインと道路の建設、労働力の確保、住居地域開発の問題が解決を待っています。

しかも、苛酷な自然条件の故に、他の地域に比べて建設費が数倍に上がり、経済的な採算性も問題になります。

大規模のヤクーツク天然ガスの開発は米国、日本、ソ連の協力による開発ならびに輸出の協議をもたしました。これはニクソン-ブレジネフのデタント政策の一部として1970年初に論議されましたが、このデタント政策は実現を見ずこのプロジェクトは中止され実現には至りませんでした。特に日本は石油開発のために4億5000万ドルの借款（後日9000万ドル追加）を提供し、1億400万トンの石炭を引き取る契約を結び、1983年から年間500万トンづつ20年間にわたる供給を受けているということです。又、日米共同でサハリンの天然ガスと石油の開発事業も進んでおります。シベリアの開発には天文学的な投資と数々の難関を克服しなければなりません。

とりわけ、ソ連からロシアへ、計画経済から市場経済への転換にはそれなりに乗り越えねばならぬ問題もあり、競争原理に基づく市場経済体制の冷酷さもわきまえながら事を進めなければならないという問題もあります。この転換は太平洋周辺国家との友好関係の増進に大いに役立つでしょう。

シベリア、極東の資源とその開発の問題は地理的にもっとも近接した東北アジアの我々にとって最も深い関心事であります。この問題を東北アジア全体と関連させ地理的経済的見地からいかなる形の交易と分業、資本、技術、人力の交流によって最も効率のよい互恵的な開発ができるかを考える研究サークルが東北アジア学術交流懇話会の中にできればと思います。



萬華鏡 西シベリアにおけるダニの感染リスク

ロシア科学アカデミー・シベリア支部・動物分類学・生態学研究所（ノヴォシビルスク）
東北アジア研究センター客員教授

M.P.モシキン

今仙台は青葉の萌えさかる頃。一方、シベリアでは春の植物、春の花、暖かさを待っている。だが、研究所でも同様にタイガに生息するダニ（*Ixodus persulcatus*）の「目覚め」を待っている。この時期より同僚達の活発なフィールドワークが始まる。しかし、この小さなダニがなぜそれほど重要なのか？実は、ダニが少なくとも二種類の病原菌を人々へ感染させる重要なリンクになるからである。それらの病原菌は常に自然界において循環している（図1）。この病原菌は、1930年代から知られているダニ脳炎ウイルスと、比較的最近発見された病原菌ライマ（*Borrelia burgdorferi*）である。実際にはロシアの全ての森林帯が、ダニ伝染による感染リスクの分布圏に入る。ダニ脳炎による最大の発病率はシベリアで起こっているが、何よりも患者の死亡率が高いのが極東である。

ノヴォシビルスク州の中ではダニ脳炎の最大の発病率が、ロシア科学アカデミー・シベリア支部のノヴォシビルスク学術センターの地域（アカデミータウン）で記録されている。したがって、アカデミータウンで約20年前に、ダニ脳炎の自然発生源の総合的な生態学的研究が始まったのは偶然ではない。この研究では伝統的な保健衛生上の観察とは異なり、自然環境におけるダニ脳炎ウイルスの流布を可能にする、寄生者と宿主のあらゆるリンクを毎年評価している。

20年の観察で蓄積されたダニ脳炎の自然発生源の多年にわたる変化に関するデータを分析することにより、病原菌の媒介動物とダニ脳炎ウイルス自身との相関関係の強度を反映する指標と長期のデータとが密接な関係にあ

ることが発見された。タイガのダニの幼虫や若虫により媒介動物である齧歯目動物の寄生率が増加し、ダニ脳炎ウイルスに対する抗体、すなわち、病源体と感染した因子をもつ齧歯目動物の割合が高まる。

ダニ脳炎ウイルス感染リスクの各年毎の変化をもたらし、生態学的経過の解釈により、西シベリアの森林帯で脳炎の危険性を予測する方法を作り上げることが可能となった。現在、トムスクでこの方法を試している。それと共に、特にダニ脳炎ウイルスの様々な感染活動の構造的・機能的原理に関する新しい問題が生じてきた。研究者は、この問題の解明に取り組み、様々な細胞の培養菌の中におけるウイルス増殖の表現型（毒性）と、分子の変化を研究している。

タイガのダニの数を減らす、生態学的に安全な方法が今のところ存在しないため、我々の関心は、化学的伝達および化学的知識のメカニズムに基づく、動物の生態を管理する方法に向けられる。この研究は、ロシア科学アカデミー・シベリア支部の有機化学研究所のアレクセイ・トカチェヴィ教授と共同で、アンドレイ・ドブロトヴォルスキにより行われている。彼らは共同でタイガのダニを不活性化させるチェルペノイドの最適組み合わせを見つけることに成功した。この物質は商業上の忌避剤を創るのに使われるであろう。ダニの繁殖調節へのアプローチを開く、性フェロモンの解釈に関する研究もうまくいっている。哺乳類の上皮により分泌される化学的信号の解釈に関する研究も始まっている。ダニをひきつける、また、彼らに餌食を待ち受ける反応を刺激する物質

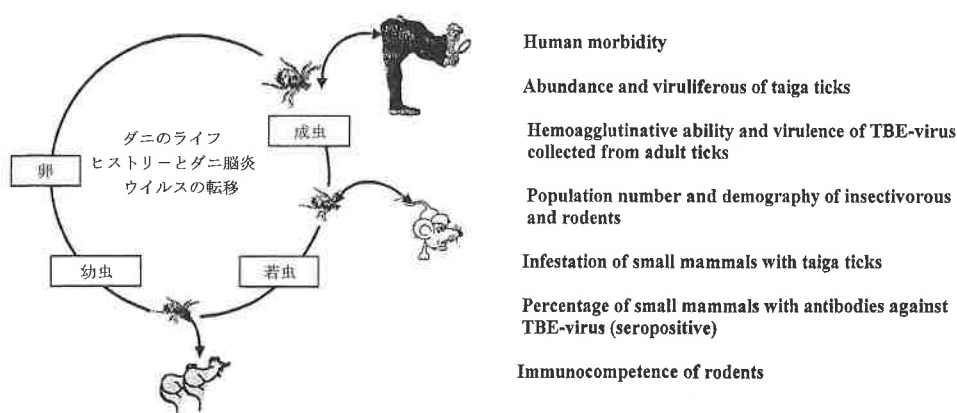
が犬の毛に含まれていることが明らかにされている。後者の効果はとりわけ興味深い。これらの物質は匂いの源から近いところで、何日かの間ダニを身動きせずつにとどまらせることができる。

このように、ダニ脳炎の具体的発生地の部分的な生物学的研究は、しだいに、動物学者、ウイルス学者、分子生物学者、化学者が参加する、真の学際的生態学研究に発展してきたのである。

（訳・文責 塩谷昌史）

図1

METHODOLOGY OF MONITORING OF TICK-BORNE ENCEPHALITIS HOST PARASITE SYSTEM



AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから ノボシビルスク就職戦線

ノボシビルスク州の公式統計では、99年に市場経済化以降初めて入職率が離職率を上回った。ただ、妙なことに、文化・芸術部門の入職者数が前年比6.7倍、入職率156.6%と、少々信じがたい数字を示している。もしこれが例年並ならば、やはり離職率が入職率を上回ることになる。少々ぬか喜びとなりそうである。それでも、99年は多くの産業部門で入職率の上昇が見られた。98年の金融危機によるルーブルの下落が、それまで外国製品に駆逐されていた国内産業にちょっとした活気を与えた結果である。ノボシビルスク市では、99年に約1万5千人が雇用局を通じて職を見つけたが、これは

前年の14倍に相当する。ただ、ここの労働市場が活況にあるわけではない。特に、若年層、新卒者の就職難が

大きな問題であるという。大学を卒業して、卒業証書を手にしたまま職安に駆け込んでくる若者も多いと言われ、昨年の新卒者で失業者と認定された者の数は、認定失業者総数の10%に達している。日本の新卒者も人ごとではないのだが。（富山大学 堀江典生）



ノボシビルスク国立工科大学

モンゴルから 「ゾド2000」の深刻度

この冬は、モンゴルの遊牧民にとってことのほか厳しいものとなった。ウヴルハンガイ県・ドンドゴビ県・バヤンホンゴル県等西部地方13県を襲った寒波と雪は、昨年夏の乾燥による牧草の生育の



凍てつく草原の大地

悪さもあって、200万頭の家畜が死ぬゾドと呼ばれる深刻な災害に発展した。2月11日、モンゴル政府が国連に対して緊急援助を要請すると、国連災害救援チーム（UNDMT）

はモンゴル政府を交えたミーティングを開き、援助に乗り出した。以後2月には国連児童基金（UNICEF）、国連人口基金（UNFPA）にフランス大使館代表が参加したアセスメント・ミッションが被災地に派遣され、3月には国連開発計画（UNDP）、UNFPA、UNICEF、国連人道援助調整局（OCHA）に政府・NGOが加わって拡大ミッションが災害状況の報告書『ゾド2000年：モンゴリア』を発表した。また国連機関や国際赤十字のほか、アメリカ、イギリス、カナダ、日本等が資金援助を始めた。また各国のNGOやモンゴル人留学生が援助金の募集を行っている。このように、国際機関や各国による緊急援助は進行中である。事態の深刻さ自体には疑いないのだが、不思議なことに、モンゴルの新聞報道は意外なほど静かである。モンゴル情報誌「しゃがあ」ホームページも、ウランバートル市民はゾドに苦しむ遊牧民に総じて冷淡だと報じている。このような危機意識のギャップは地方を顧みる余裕がない市民生活を反映しているのかもしれないが、モンゴルにおける都市と地方の関係の意外な側面を浮き彫りにしている。（岡 洋樹）

中国から 中国からの留学生事情

中国からの学部留学生は、どこの大学でも増えている。東北大学も例に漏れず、留学生の主要な数を占める。その原因の一つとして、中国の高等機関がまだ少ないことが考えられる。中国で進学できない人が日本に来ることも多いらしい。中国の短大以上の進学率はおよそ9%、今後10年で15%にしたいという。各大学では、今年から定員増をはかった。しかし、15%までもっていくには、毎年平均40万以上増加しなければならないことになる。ある中国の大学の副学長は、「ここ数年で、入学定員を倍にしないといけないのです」とため息をついた。すんなりとはいきそうもない状況である。

これに反して、日本の大学は、学生数が減り始めたので、今後の経営を嘆く声も聞かれるようになった。同上の副学長は、「日本の大学関係者が組織の代表として学生勧誘に来るようになった」と言い、

その思わぬ助けを脳裏に描いたのか、複雑な笑いをこぼした。しかし、これは日本に限ったことではない。少子化に悩む欧米も勧誘の手を伸ばし始めているらしい。

機を見るに敏な知人は、教育産業のビジネスチャンスとばかりに、アパート2部屋を改造し、留学生になるための予備校を創った。中国の留学生は、各国のお家の事情とうまく絡み合って、ますます増えると思われる。蘇る科挙の伝統を、現代中国社会は如何に受け入れていくのだろうか。（磯部 彰）



中国の地方大学

朝鮮地域から 南北首脳会談

韓国では「南北頂上会談」といい、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）では「北南最高位級会談」と称している。過去に何度か計画や呼び掛け合いがあったが、果たされなかった。しかしこの度はどうも実現しそうである。金大中大統領が呼び掛け、北朝鮮側もこれまで例のない表現で金大中[大統領]と呼称し、これに応じている。目下、板門店の会談場で予備会談を繰り返しているが、問題は多い

と思われる。特に日本にしてみれば、現在日朝会談も進行中であり、この行方にも明確に影を投げかけよう。なかでも北朝鮮は戦後補償の問題をどのように持ち出してくるか。日本の基本的立場は日韓基本条約締結時に、朝鮮半島の唯一の合法政府として韓国を認め、もって朝鮮の対日請求権の問題もクリアされた。日本としては、法手続上朝鮮に対する賠償問題は、今度は韓国と北朝鮮との間で議論の俎上に載せられるのが筋であると見なすであろう。（成澤 勝）

■ 活 動 ■ 風 景 ■

◎学術講演会 2 件

『韓日の歴史認識と歴史教科書 — 「歴史の対話からみたその現状と課題」 —』（鄭在貞氏）

2000年2月12日（土）川北合同研究棟4階会議室において、東北アジア研究センターの鄭在貞（チョンジェジョン）客員教授（ソウル市立大学教授）を講師に迎えての公開講演会が開催されました。鄭先生は韓国の鉄道史研究、及び日韓歴史教育・歴史認識研究の面で韓国の代表的研究者であります。講演は「韓日の歴史認識と歴史教科書 — 「歴史の対話」からみたその現状と課題 —」と題して、闊達な日本語によって行われました。参加者は当初の予想を大きく上回り、110名余りになり、そのため、会場内での設営や資料配布面に時間がかかり若干遅れて始まりました。主催者にとってはうれしい悲鳴であるとともに、この問題に関する社会的関心の高さを改めて認識させられました。

講演内容は、「歴史の対話」を通じて韓国と日本の似ているところと異なるところを、それぞれの歴史的背景を踏まえて改めて見直し、またそれぞれの歴史認識を掘り下げることによって、共通の成果を生み出すとともに、自国史の相対化、民族主義・ナショナリズムへの対応、国家を超えた歴史認識の枠組みの可能性、共通の歴史教材作成の可能性などの論点、「対話」によって、歴史事実に基づいて、相互の信頼性・誠実性、歴史認識の多様性、チャンネルの拡大によって「共に生きる平和な未来を構築するための共通の歴史的基盤を作る」ことを提言されました。

講演は、「厳しい話ですから、笑いながら話をし、またお聞きいただきたい」など、聴衆の緊張をほぐしながら、韓国と日本の「歴史の対話」の進展と将来について、ご自分の実践的経験に裏打ちされた説得的なものであり、参加者に深い感銘を与えました。

そのため、講演後の質疑応答においては、活発な質問や意見が出され、1時間近く熱心に行われました。植民地条約の有効無効問題、「在日」の問題、支配層と民衆の問題、等々の質問に対して、誠実にしかし確固とした信念に基づいて的確なお答えをされたことが印象に残りました。



○『ブリヤート共和国における学術研究』



『ブリヤートの人文社会科学的研究』（ボリス・バザロフ氏） 『ブリヤートの自然科学的研究』（ジブゼマ・バザロヴァ氏）

ロシア連邦ブリヤート共和国より、ボリス V. バザロフ博士（ロシア科学アカデミー・シベリア支部・モンゴル学仏教学チベット学研究所所長）およびジブゼマ G. バザロヴァ博士（ロシア科学アカデミー・シベリア支部・バイカル自然マネジメント研究所教授）のお二方をお招きし、2000年3月2日、東北大学川北合同研究棟4階会議室において講演会を開催し、それぞれ標記のタイトルで人文社会科学の大規模プロジェクト、及び自然科学分野の最近の状況とブリヤート国立大学との関係などについて貴重なお話を頂きました。ブリヤート共和国はウラン・ウデを中心としてバイカル湖の周囲に広がるロシア連邦構成共和国であり、ブリヤート民族が独特の文化を維持するとともに、美しい自然に恵まれた地域であります。また、東京外国語大学の二木博史教授からは、『ブリヤート現代史とモンゴル現代史の接点』というタイトルで、ブリヤートとモンゴル現代史の歴史問題に関し、最新の研究成果に基づいたご講演を頂きました。さらにブリヤートと東北アジア研究センターとの今後の研究交流について意見を交わし、大きな成果をあげることができました。

さらにお三方の先生に対して、熱心かつ真摯な質問がなされ、各先生のお答えも啓発するところの多いものでした。今後、本研究センターはロシアの各種学術機関との交流を拡大していく予定ですが、ブリヤートの各種学術機関で中心的な役割を果たしておられるお二人の先生をお迎えしての意見交換は、この点においても極めて有意義なものでした。このように今回のブリヤート講演会は、今後の本学とブリヤートとの学術交流を大きく推進するきっかけとなるものであったといえます。

◎公開シンポジウム

『エリツィン後のロシア：日露関係の展望』

標記のテーマのもと東北アジア研究センター主催の公開シンポジウムが、2000年3月17日 仙台市川内の国際センターで開催されました。報告の講師には、渡邊幸治元駐露大使（本研究センター客員教授）とアレクサンドル・

パノフ駐日ロシア連邦大使のお二人をお招きし、コメンテーターには、吉田進氏（日商岩井顧問、環日本海経済研究所所長）、コンスタンチン・サルキソフ法政大学教授のお二人にそれぞれお願いいたしました。

当日は、前日の雪が残る中にもかかわらず、遠方からの参加者も含めて約60名の参会者がありました。パノフ大使及びサルキソフ教授は流暢な日本語で、3月26日に予定されているロシア大統領選挙と今後について分析されました。当代の第一級のロシア専門家である渡邊・吉田両氏、またロシアの対日外交の責任者であるパノフ大使と日本研究の専門家であるサルキソフ教授が、エリツィン前大統領の歴史的評価とプーチン次期大統領の人柄、彼の大統領就任後の対日スタンス・北方領土問題、またロシア社会・経済の動向などホットな話題についてお話されました。他では聞くことのできない貴重な報告・コメントが相次ぎ、また的確な話題に絞ったレベルの高い質疑応答がなされました。



この豊富な指摘と論点は、過去そして将来の日露の外交関係全般、またロシア問題を考える上で極めて基本的・重要な内容を持っております。多忙なパノフ大使が仙台まで来られてのシンポジウムであり、社会的に大いに意義のあるものでした。内容の詳細については、早い段階での報告書を作成したいと考えております。

日本館 便り

nihonkan-dayori

だんだん日も長くなり4月現在では夜8時でもまだ薄明るいシベリアです。サンクトペテルブルグの白夜は有名ですが、ここでも真夏は11時頃に日が暮れ、朝の4時には明るくなり始めます。白夜もこんな感じなのではないかと想像しますが、「白夜ではない。何時間かは真っ暗になるじゃないか」と誰からも反論されてしまいます。どうもノボシビルスクっ子はヨーロッパロシアとシベリアは違うのだという意識が強いようです。シベリアの首都であり、学問の中心地でもあるのだという事に誇りを持っているのでしょう。

さて、その学問の街で3月21日～24日「教育に関する万博」が開催されました。会場は市内で最も有名な展示場「シベリアフェア」。日本館にも出展依頼があったのですが、万博開催の10日前と急な話であったため今回の出展は見送られました。話の種にちょっと覗いてみようかという軽い気持ちで出向いたのですが地下鉄の駅から会場方向へは人の波ができており、会場付近には観光バスが列を成していました。あまり期待していなかったのが正直、意外でした。教育



に関するならば教材、機材、何でも出展して構わないという説明は依頼があった時に受けていたため、企業の出展が主体かと思いきや初等、高等教育機関の多さが目を引きました。こちらは学区制ではなく初等教育時から英語、仏語などを専門的に教える学校もあり、これが学校選びのポイントになっているのでこういった催しが各学校の教育方針や実績などに関するPRの重要な場所となっているようです。学習機やコンピュータ販売会社、出版社、投資家を獲得しようと研究成果を紹介している研究

所、ほとんど即売会場と化している芸術学校など、様々な分野から大人、子供、遠方よりの出展も合わせ150近い組織が参加していました。健康について考える怪しげな団体のブースでは手軽なダイエット法を紹介しており、インストラクターが体格のよい女性だったにもかかわらず興味津々のご婦人達で溢れかえっていたのが印象的でした。

この他、会場には2つのステージが設けられ子供達のコンサートやコンクールなど、訪問者はもとより出展側も楽しめるような企画が盛り沢山でした。主催者側より、このテーマに関する万博は毎年3月下旬に開催されているので来年はぜひ日本館はじめ日本からの出展を期待しているとのコメントを受けました。学問を武器に一層の発展を狙ういかにもノボシビルスクらしい催しでした。

(徳田由佳子)

課題探訪

〈地球温暖化問題の政治的状況〉

「我々が今行っているのは、文明の遺伝子記号（genetic code of the civilization）の書き換え作業だ」。これは、最近の地球温暖化問題に関わる国際会議での某国外交官の発言である。筆者はこの言葉を耳にしたとき、とにかく「格好良い」と思った。また、そのような発言ができる外交官を持つ国を「羨ましい」とも感じた。その国の豊潤な言葉の文化を思い、自分や自分の周りを見渡して、少々寂しさも覚えた。とにかく、彼のおかげで、「文明の遺伝子とは何か」「遺伝子ならば、どのように複製（普遍化）されているのか」などの問題について考えるという、しばし幸せな時間を過ごすことができた。

とは言いつつも、筆者は地球温暖化問題に関していえば、惹かれるものの、いわゆる文明論に大きな期待をもっていない。なぜならば、大上段な文明論が、かえって問題や対策を雲の上のような話にしてしまったように思えるからである。それに、現時点において最もクリティカルな事は、「アメリカ上院議会」を何とかすることなのである

現在、上院の共和党議員を中心とする超保守派が、ほぼすべての多国間協定の批准を、「アメリカの国益に反する」という非常に単純な理由で事実上不可能にしている。97年の京都での地球温暖化会議を前にして、上院議会では「途上国の新たな義務が導入されない議定書が採択された場合、議会はこれを批准しない」という決議を97対0（満場一

致！）で可決した。その上、現在、「京都議定書を上院が批准するまで、連邦予算で地球温暖化対策を講じることを禁ずる」という内容の法案も提出されている。完全にこれは、相手（途上国および排出削減に積極的な内外の人々）のみに妥協を強いる「チキン・ゲーム」（崖のどれだけ近くまで車のブレーキを踏まずに近づけるかを競うゲーム。アメリカやロシアの場合は、車が丈夫なので崖から落ちてでも衝撃が小さい、すなわち地球温暖化による損害が小さいことのみぞ）である。ここまで自国第一主義が戦略的に展開されると、反発を通り越して感心してしまう。

ただ、とてつもなく大きな多様性を持つのがアメリカ社会でもある。地球温暖化問題に限らず、何が倫理的に正しいか、あるいは正しくないかを真摯に問う人々も決して少なくない。その代表格とも言えるジョン・ロールズの哲学（正義論）を、筆者は「弱きを助け、強きを挫く」と単純に理解している。乱暴な議論かもしれないが、少なくとも「冷房設定温度を上げたくない人々の正義」と、「地球温暖化で多くの避難民や死者が出る国に住む人々の正義」だったら、後者を尊重すべきであり、それが真つ当な意味での「人道」ではないだろうか。遺伝子は利己的であり、かつて司馬遷が問い続けた「天道」も、結局はないのかもしれない。が、少なくとも「人道」は、どこかに存在すると信じたい。

（明日香壽川）

センター動向

本年4月～6月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

【国内から】

- 渡邊幸治（ワタナベ、コウジ）教授：経済団体連合会特別顧問・元在ロシア連邦日本国特命全権大使、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 横山隆三（ヨコヤマ、リュウゾウ）教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

- KIM Le Tchoun（キム、レチュン）教授：ロシア、ロシ

ア科学アカデミー・世界文学研究所首席研究員、ロシアと東アジアの思想交流の研究

- MOSHKIN, Mikhail P.（モシキン、M.P.）教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部動物分類・生態研究所副所長、小型哺乳類の個体群生理学
- 陳春林（チン、シュンリン）研究員：中国、廃棄物溶融炉の炉内解析に関する計算機シミュレーション
- BARINOVA, Anna A.（バリノワ、A.A.）研究員：ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部細胞・遺伝学研究所研究員、東北アジア地域における淡水動物の遺伝的多様性に関する研究
- 周輝（シュウ、キ）研究員：中国、青島海洋大学講師、VSATを利用するデータベースの構築利用に関する研究

（柳田賢二）

東北アジア史
研究最先端

津軽十三湊と日本海 交易の展開

鎌倉後期～室町前期にかけて、すなわち13世紀後半～15世紀前半にかけて、津軽十三湊は、北方世界随一の交易港でした。「廻船式目」（室町期に成立）には、「七湊」として、越前三国・加賀本吉・能登輪島・越中岩瀬・越後今町（直江津）・出羽秋田・奥州津軽十三の湊が列举されていました。室町期には、日本海交易の最北端のターミナルとして、十三湊の存在が天下に知られるまでになっていたことが明らかです。

「十三往来」（『津軽一統志』附巻）には、「西は滄海漫々として、夷船・京船群集し、舳先を並べ、舳を調べて、湊は市を成す」と記されていました。「新町は棟を並べ、軒を振りて、数千万家造り、商人の売買は心に任せて、民烟稔るなり」とも記されていました。京都方面から夷が島（北海道）方面に及ぶ広範囲の船舶を群集させるターミナルとしての賑わいが、臨場感をもって伝わってきます。



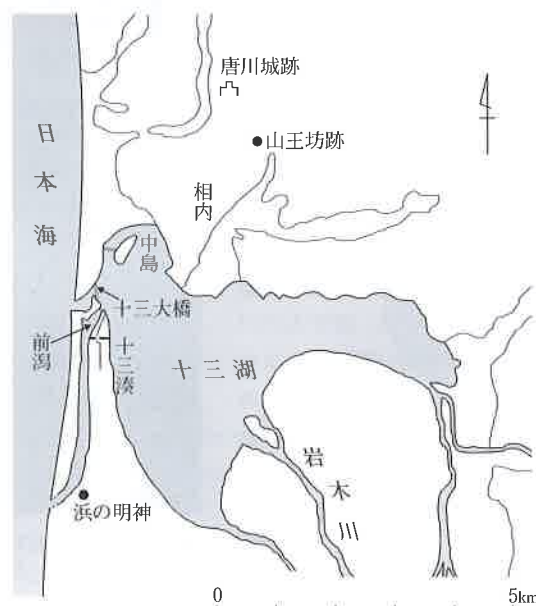
十三湊（集英社『日本の歴史』⑦より）

十三湊に入来する京船（船）には、小袖など京都方面の物産のほか、銭貨・青磁など中国渡来の品目が積み込まれていました。同じく入来の夷船（船）には、干鮭・昆布など夷が島の物産のほか、海虎皮（ラッコ皮）など千島方面の産品が積み込まれていました。その津軽十三湊に繁栄した大名が、日之本將軍安藤氏なのでした。北方の交易を取り仕切って、空前の財力を誇った海の名大なのでした。

その津軽十三湊の賑わいと日之本將軍安藤氏の繁栄に関する具体的な解明作業については、長い間、何の手掛かりが得られないままに放置されてきたのでした。それが、ようやく、近年になって、国立歴史民俗博物館・青森県市浦

村教育委員会による発掘調査が実施され、都市遺構の数々が復元され始めることになったのです。中軸街路・町並・居館・港湾施設など、驚くべき発見が相次ぐことになったのです。1993年には、国立歴史民俗博物館ほかの主催によって、「遺跡にさぐる北日本—中世都市十三湊と安藤氏—93市浦シンポジウム」が開催されて、学界の内外に大きなインパクトを及ぼしています。しかし、室町後期に、十三湊の賑わいが失われ、安藤氏の繁栄が消滅させられていった原因ないしは経過については、いまだに、明らかにされているとは言い難いものがあります。興国元年（1340）の大津波が原因とする地元の伝承が当たらないことはもちろんです。岩木川の運んでくる砂の堆積によって港湾の水深が浅くなり、鰻ヶ沢（青森県）や上ノ国（北海道）の港湾が代わりに利用されるようになったとする見解も出されていますが、なんとなく、しっくりしません。

ところが、最近になって、嘉吉2年（1422）に、南部氏の



十三湊の立地（千田嘉博氏作図）

攻撃によって、安藤氏が十三湊から没落した直後における廃墟の景観が、手に取るように見えてきたのです。国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏が、最近の発掘を踏まえて書いています。広い範囲にわたり数多くの建物が火災で焼け落ちていました。整然とした町並みは完全に放棄され、道路や屋敷地の中におかまいなくたくさんの墓がつくられました。美しかった十三湊は惨澹たる状態になって、壊滅的な打撃を受けたことが明らかです……と（『安藤氏の繁栄と滅亡』、『ものがたり 日本列島に生きた人たち』岩波書店）。これで相当に分かってきました。つけ加えていえば、南部氏の交易拠点である田名部湊（陸奥湾）が、代わりに栄えるようになったという基本的な事情もあったようです。それについては、自分なりに調べている最中です。いずれ、詳しく報告させていただくことになろうかと思います。

（人間田宣夫）

科学技術交流の **新** 展開

今年始めに、「懇話会を活動基盤としての科学技術交流をより積極的に推進して行く」旨、東北アジア研究センター側から方針が出され、新しい活動が展開されつつあります。ここでは一例として「研究実験機器のリユース」を手段とした技術交流について以下に概略を紹介いたします。

写真の装置は、アカデミータウンの研究所で現在使用されている電子顕微鏡の一例で、約30年前の東独製の装置です。

一般に、日米を中心としたハイテクブームの成果が織り込まれている約15年前以降に製造された研究機器の機能は、20年以前に比べ大幅に高性能化されています。電子顕微鏡も例外ではなく、その間にフィラメント素材の発達などで輝度、分解能などが大巾に改善されました。

ところで、ロシア科学アカデミーシベリア支部には100以上の研究所がありますが、10年ほど前の体制転換後からは、ほとんどの研究所で実験機器の更新ではなく、20～30年前の機器を研究者自ら修理しつつ使いこなしている場合が多いようです。このような研究環境の窮乏にも拘らず、優秀な研究者育成システムと、冷戦時代に培った高レベルのノウハウ技術により、既に懇話会会員の方にはお配り済みの、「テクノロジー採択プロジェクト要旨集」に見られるような先端技術群、並びに「シベリア通信／創刊号」に掲載されている、触媒研究所開発の大豆微細エマルジョン化装置など、日本の企業技術者を興奮させるユニークな研究成果が現在でも得られております。

● 機器のリユース活動

他方、日本の企業研究所などでは、研究テーマの変更などにより、まだ使用できる最新の優れた機器を遊休化あるいは廃棄処分にする事があります。

このような状況を踏まえ、私どもはNPO（非営利組織）を設立し上記の両者を結びつける活動を準備中です。活動の骨子は以下の通りです。

- シベリアの研究者に対する、研究実験設備・装置機器等の 供与支援活動
- シベリア研究所技術成果の、日本企業に対する技術移転活動



今も研究所で活躍中の、旧式電子顕微鏡
(約30年前東独製)

この活動は、遊休機器等の分譲があって始めて成立するものであります。研究テーマの設定変更などで遊休化した実験研究設備を処分するなどの場合、私どもに分譲していただきますと、産業廃棄物としての処分経費がなくなるなどのメリットがございます。遊休品発生時には是非私どもにご賛同いただき、ご一報くださるようお願い申し上げます。

またNPO設立は 東北アジア学術懇話会会員を母体に設立したいと考えておりますので、円滑な活動を行なう為には、現在

の百数十名の会員を数倍以上に増員する必要があります。今後、会員の方への情報等も質量共に向上させてまいりますので、周囲の方々をも是非お誘いくださるよう紙上を借りてお願い申し上げます。

(東北大学東北アジア研究センター研究支援推進員 岩山健三)



今回もロシアシベリア地域を一つのテーマにした構成にしました。日本ばかりでなく、近隣・周辺諸国でも当該地域のさまざまな分野に対する学術研究が進展し、相互に情報交換ができるであろうという希望も十分持つことができそうです。あるいは、それらをリンクしていく専門機関が必要になるのではないのでしょうか。 (成澤 勝)